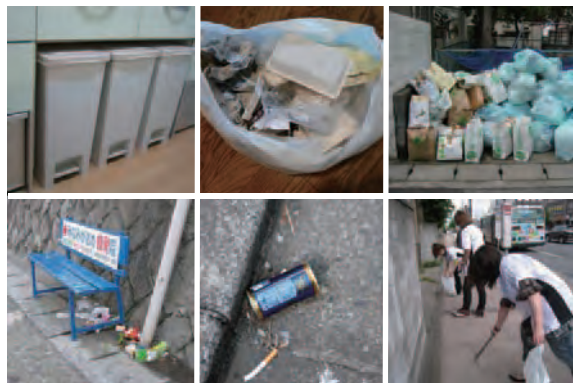




ゴミのライフライン

30年後に提案出来ることとは何があるだろうか。現状の問題は解決されているのだろうか。100年周期の都市のインフラを整備し直すには30年という年数は短かすぎる。住宅や風景などにおいても、著しい変化が起こることは考えにくい。しかし、住み方の形式が変わらない代わりに、ソフトウェアを組んだ住生活は著しい変化が起こることが予想される。

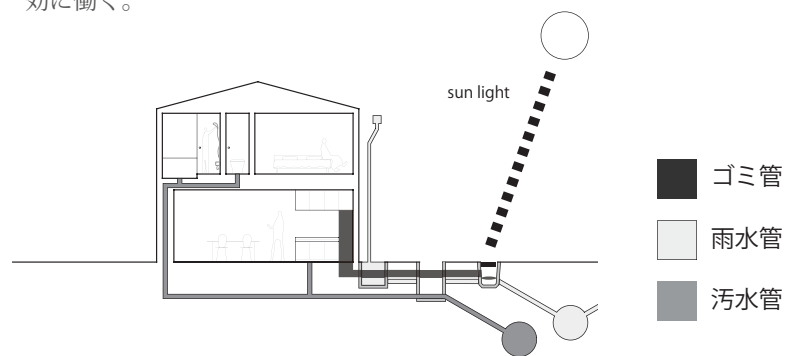
近年では、スマートグリッドなど、供給側とも連携を取るようになり、電力消費を削減している。住空間において、消費されるのは電力に限らないのではないか。電力が見える化された、現代において次に見えるべき対象は“ゴミ”ではないか。



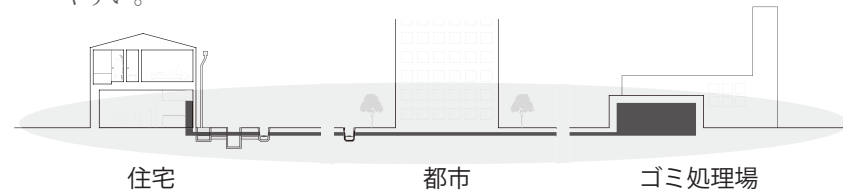
そこで、本提案はゴミの移動装置を提案する。住空間におけるゴミの処理、都市空間におけるゴミの処理を提案する。30年後の、交通道路の風景のために現在のゴミ処理の方法を再考する。

建物には生活環境をよくするために必ず、設備配管が存在する。電気、空調、排水の他に“ゴミ”のための配管を新たに設ける。そのゴミは側溝に流れる。側溝にも設けられた運搬装置で、ゴミ処理場までゴミを運ぶ。

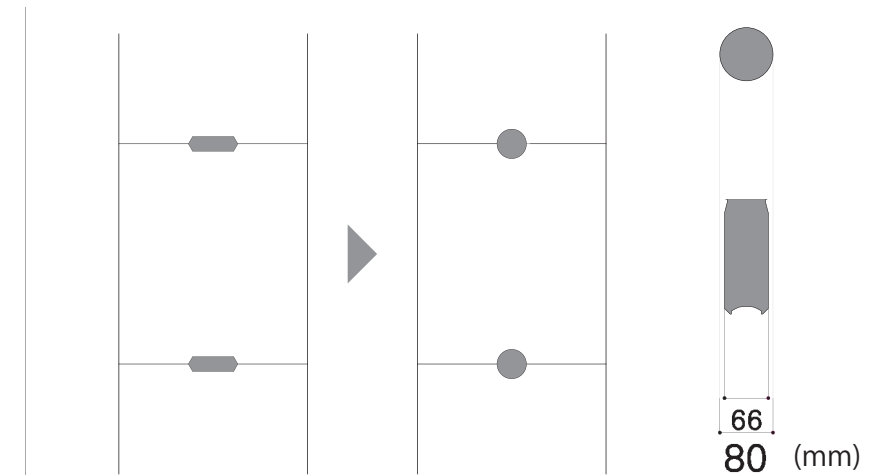
また、太陽光を再利用するパッシブソーラーを用いて、装置自体が発電し稼働する。日中に溜めた電力を利用して夜間稼働を実現する。同時に、側溝の蓋自体が発光し暗い夜道を照らす。街灯の数も削減でき、道路の輪郭に合わせて発光するため、追突などの事故に対して有効に働く。



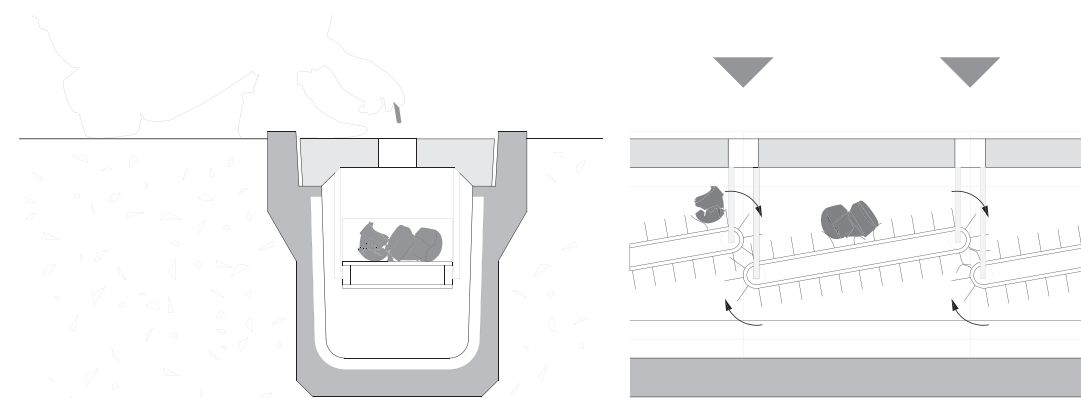
このゴミの移動装置により、住宅、都市のゴミをゴミ処理場へと直結する。“見える化”の進む現代で、30年後は自分の出した“ゴミの量”が見える化する。一家庭当たりの一日平均ゴミ量は年間ゴミ総量から算出できるが、それは平均であって具体的な数値がでるわけではない。そのため、現実味がなく知識が増えた程度で満足してしまう。処理場側と連携を取り、具体的な数値を出すことで自治体などが目標を立てやすい。



側溝を覆う蓋を乳白色のガラス素材に変更する。自然素材に近い素材を用いることで、側溝の印象を変化させると同時に、パッシブソーラーの装置を設ける。



現状の既製品の穴を“六角形”から“円”に変更する。また、穴の大きさは現状の面積と同等にする。同時に、飲料水の缶の最大径が通る大きさにする。これにより、出歩く際の最大の大きさのゴミといえる“空き缶”のポイ捨てを防ぐ。



SECTION-A 1/20

SECTION-B 1/20

都市におけるゴミの捨て方を変化させる。側溝に装置を設けることで、交通道路でのゴミを減少させる。

大規模な変更はせずに現状の規格に従い、側溝の蓋をデザインする。

蓋の間にゴミを入れると、蓋に設置されたベルトコンベアにより、ゴミをそのまま処理場まで運ぶ。

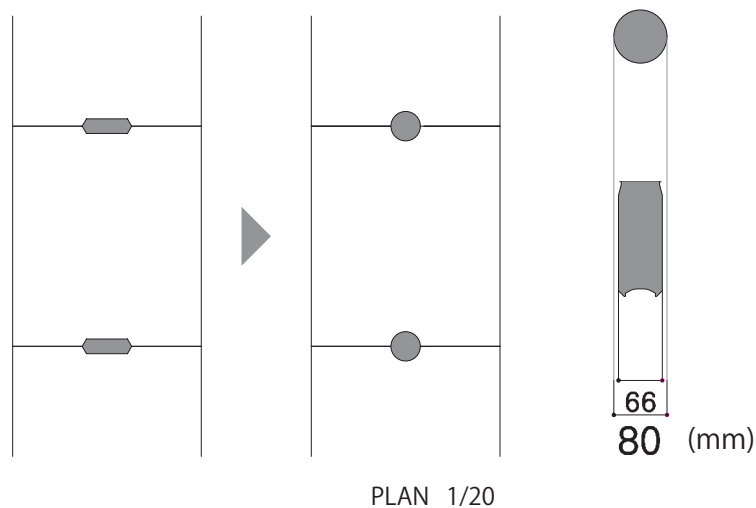
■素材

側溝を覆う蓋を乳白色のガラス素材に変更する。自然素材に近い素材を用いることで、側溝の印象を変化させると同時に、パッシブソーラーの装置を設ける。



■図面

現状の既製品の穴を“六角形”から“円”に変更する。また、穴の大きさは現状の面積と同等にする。同時に、飲料水の缶の最大径が通る大きさにする。これにより、出歩く際の最大の大きさのゴミといえる“空き缶”のポイ捨てを防ぐ。



都市におけるゴミの捨て方を変化させる。側溝に装置を設けることで、交通道路でのゴミを減少させる。大規模な変更はせずに現状の規格に従い、側溝の蓋をデザインする。蓋の間にゴミを入れると、蓋に設置されたベルトコンベアにより、ゴミをそのまま処理場まで運ぶ。

